

【フォーラム】

滋賀県湖北方言のノダ文のアクセント形式と意味

脇坂 美和子

【要旨】本稿は、滋賀県湖北方言の京阪式アクセントに属する変種に見られる2つのアクセントパターンの交替を記述し、その形式と意味を明らかにすることを目的とする。この方言には、述語文のアクセントを維持する無標の=N=yaと、これを平板化する有標の=N(=ya)が存在する。無標の形式は、共通語のノダ文の文脈で全て使用できるのに対して、有標の形式は話者が話題について予備知識をもつことを前提に、これを説明または真偽を確認するときのみ現れる。これは、方言研究において、たとえば井上(2006a)に見られるような、平叙文においては異なる方言形式が、共通語ではともにノダ文で表され、異なる意味を表すという記述に合致するとともに、先行研究におけるノダ文の交替を文法化とみなす傾向を支持するものであり、また疑問文においてもこれを適用し得ることを示唆している。この方言においては、このような区別がアクセントの交替によって実現されていること、またその意味がモダリティに関わるものであることから、本稿では、ここに観察されるアクセントの交替が、日本語方言の文法化やノダ文のモダリティの記述に際して考慮すべきファクターであることを主張した*。

キーワード：滋賀県湖北方言、ノダ文、アクセント交替、平板化

1. はじめに

滋賀県湖北方言（以下湖北方言）は琵琶湖の北東部、2021年現在の長浜市と米原市の全域に当たる地域（地図1）で話されている方言の総称である。この方言は、アクセントが混在していること¹（生田1951、井之口1952など）や特徴的な待遇表現があることなどの理由により県下でも「特異な方言」（寛1962）と位置付けられてきたが、京阪方言や共通語への同化も広く観察されており、方言内部の多様性は失われつつある。生田らの研究以降も、山口（1998）などのいくつかの報告は見られるが詳細な文法記述は進んでいない。

本稿では、湖北方言の総合的な文法記述に資することを目的として、共通語のノダに対応する湖北方言のンヤ（以下=N=ya、撥音に後続する場合は=no=ya）とその交替形を持つ文を共通語に倣ってノダ文と呼び、その音韻的な交替を示す現象について記述と分析を行う。ここでは、この方言のアクセントの異なる変種のうち京

* 本稿の初期の構想は2018年2月24日の関西音韻論研究会（PAIK）および2018年3月6日の音韻論フェスタ2018において口頭発表したものである。参加者に多くのご指摘、コメントをいただいたことに感謝申し上げます。本稿はこれを再構成し全面的に書き改めたものである。3名の査読者には細部に渡って有用なご指摘、ご意見を頂いた。記して感謝申し上げます。

¹ 京阪式アクセントと複数の特徴を併せ持つ中間アクセント（生田1951ほか）、垂井式A（山口1998ほか）などが点在する。筆者のデータもこれを支持する。

阪式アクセント²に属する変種を扱う。

本稿の構成は以下の通りである。2節では、諸方言のノダ文に相当する形式が先行研究でどのように分析されているかを検討する。3節では、湖北方言の本稿で扱う変種についてアクセント体系の概要を述べた後、湖北方言のノダ文には、平叙文においては名詞化辞の=Nにコピュラの=yaが義務的に付く無標の形式と、優勢の形式では=Nのみが後続し、コピュラは随意的になり=Nを含む述語名詞句が平板化する有標の形式があることを示し、それぞれについてデータに即して記述を行う。4節ではこのアクセントパターンの交替の意味を先行研究を参照しつつ考察する。5節では、本稿に示す言語事実から、



地図1 滋賀県
(脇坂 2015 を元に作成、
斜線部が湖北地方)

ピッチアクセントの交替をノダ文の表す意味とモダリティに関与するファクターとして考慮に入れる必要性を主張し、全体のまとめと今後の課題を述べる。

本稿において例文は音素表記とし、促音、撥音、長音はそれぞれ Q, N, R で表記する。「-」、「=」はそれぞれ接辞境界、接語境界を示し、単一形態素が複数の意味に対応する場合は複数の意味を「.」でつなげて表示する。ピッチアクセントの高い位置を「】」で示す。式は H (高起式)、L (低起式) で表し、アクセント核の位置は 0 (平板)、1、-1 (語頭、語末から 1 モーラ目に下がり目) 等の数字で表す。データは 2003 年と 2019 年に収録した談話資料から採取したものと 2021 年にエリシテーションを行ったものを使用した。談話資料の収録時間は約 1 時間、被調査者は、1921 年から 1938 年生の母語話者男性 2 人、女性 2 人である。エリシテーションは 1936 年生の男性と 1938 年生の女性に対して行った。資料には、被調査者の符号、生年、性別とエリシテーションについてはその旨を付記した。音韻的なピッチアクセントの高低については、エリシテーションによる。そのほかの文法性の判断と作例は同方言の母語話者で 18 歳までこの地域で生活した筆者の内省によるが、複数の母語話者に確認を行っている。

2. 先行研究

日本語諸方言における、共通語のノダに相当する方言形式の意味と機能については、数多くの記述と分析が進められている。ノダに相当する形式が複数存在する方言では、それぞれの意味と用法について、どのような一般化が成立するかが示され (井上 2006a, 井上 2006b など)、その歴史的な変化が推定されてきた (新田 2004, 野間 2019 など)。このノダ相当文の歴史的な変化に、語形の短縮化や脱範疇化のようないわゆる文法化の特徴が認められる (新田 2004: 179-180) ことは、これらの

² 中央部の京都市方言 (中井 2002) などに記述されるものと基本的には同様であるが周辺部に属するものであり、異なる点も見られる。この地域では北部を中心に分布する。

先行研究によって繰り返し指摘されてきたことであり、ノダ相当形式の活用の有無（井上 2006b）や、コピュラの有無、後続する終助詞（野間 2014）などが、これに関与することが指摘されている。本稿で扱う湖北方言についての記述は、このような先行研究の分析を基本的に支持するものである。これに加えてこの方言に特徴的な点は、ノダ文の意味と機能の分岐が述部のピッチアクセントの平板化の有無によるものであるというところである。先行研究では、母音の質的变化が関与する事例（新田 2004）や、コピュラの有無が関与する事例（野間 2014）などの記述はあるが、ピッチアクセントの交替が関与する現象については筆者の知る限り報告はない。本稿では、湖北方言のノダ文について、これらの現象を記述し、諸方言のノダ文の意味と機能を論じる際にもこのような要素の関与を考慮する必要があることを明らかにするものである。

3. 湖北方言のノダ文のアクセント交替

本節では、湖北方言のノダ文に見られるピッチアクセントの交替とその意味を記述する。3.1ではこれを論じるに先立って、湖北方言のアクセント体系の概要を示す。3.2では湖北方言のノダ文に相当する形式には、先行する述語形式のアクセントには影響を与えない無標の形式と、名詞化辞の =N を含む述語部分が平板化する有標の形式の 2 種類があることを示し、それらが現れる環境を用例に即して記述する。

3.1. 湖北方言のアクセントの概要

本稿の資料となる湖北方言は、上述のとおり、京阪式アクセントに属する変種である。すなわち、ピッチの下がり目が弁別的であるのに加えて、語が高く始まって核まで、核がなければ文節末まで平らに進むか、低く始まって一定の箇所まで上昇するかという式の区別（中井 2002）を持つ。ここでは、中井に倣ってそれぞれ高起式、低起式と呼ぶ。動詞のアクセントは拍数に関わらず H0、または L0 が基本であるが、H-3 型も見られる。イ形容詞に関しては京都市方言と同様で、ほぼ H-3 で少数の L0 がある（中井 2002: 42）³。ナ形容詞は名詞に準じる。名詞については、2 拍名詞においては京阪方言と同様に類別語彙（日本語学会編 2018）の 2 類と 3 類が合流しており 4 通り、すなわち、高起式と低起式にそれぞれ核あり、核なしのアクセントパターンを持つ⁴。このような述語形式にノダ文に相当する =N=ya または =N(=ya) が後続する場合のアクセントのパターンを次に見て行く。

3.2. 湖北方言のノダ文のアクセント交替

湖北方言のノダ相当の形式には、1) 平叙文ではコピュラの =ya を伴って述語形

³ 動詞とイ形容詞の過去形については複雑な交替がある（角道 1982）が、本論とは関係ないのでここでは問題にしない。

⁴ ただし、ナ形容詞については低起式には語幹部分が 2 拍の形式が観察されないため 3 拍の例を示している。3 拍以上の名詞、ナ形容詞についての精査は課題としたい。

式に低接⁵し、前部要素のアクセントには影響を与えない無標の=N=yaと、2)コンピュータを伴わない形式が優勢で、=Nによって述語名詞化される複合形態のアクセントを平板化する有標の=N(=ya)がある。この有標の形式では、前部要素が有核の場合、平板化が起こる。前部要素の式は保存され、前部要素と名詞化辞=Nを併せた単位をドメインとして有標の形式が実現する。=Nを含む述語名詞句が平板化すると前部要素が高起式の場合は=Nによって名詞句となるアクセント単位全体が、低起式の場合はアクセント単位の最終拍のみが高いピッチで現れる。この場合、=N(=ya)は前部要素に低接する性質を失い、コンピュータが現れる場合は=yaのみが低接する。疑問文では疑問辞の=kaが義務的に現れ、名詞句に順接する形で最後部のアクセント単位に含まれるため、最終拍として高いピッチで実現する。それぞれが後続する述語形式を表1に示す。

表1 湖北方言のノダ文のアクセントの交替⁶

		=N=ya (無標の形式)		=N(=ya) (有標の形式)		
		高起式	低起式	高起式	低起式	
動詞	平叙文	非過去	[uk-u]=N=ya [wa]kar-u=N=ya	yo[m-u]=N=ya yoN[-da]=N=ya	[uk-u=N](=ya) [waka-r-u=N](=ya)	yom-u[-N](=ya) yoN-da=[N](=ya)
		過去	[u]-i-ta=N=ya [wa]kaQ=ta=N=ya	yoN[-da]=N=ya yom-a[-N]=no=ya	[u-i-ta=N](=ya) [wakaQ-ta=N]=ya	yoN-da=[N](=ya) yom-a-N=no(=ya)
読む yo[m-u]	疑問文	真偽	[uk-u]=N(=ka) [wa]kar-u=N(=ka)	yo[m-u]=N(=ka) yo[m-u]=N(=ya)	[uk-u=N=ka] [waka-r-u=N=ka]	yom-u=N[=ka] なし
		疑問詞	[uk-u]=N(=ya) [wa]kar-u=N(=ka)	yo[m-u]=N(=ya) なし	[uk-u=N(=ya)] [waka-r-u=N(=ka)]	なし なし
イ形容詞	平叙文	非過去	[a]o-i=N=ya ao-[ka]Q-ta=N=ya	yo[-i]=N=ya [yo]-kaQ-ta=N=ya	[ao-i=N](=ya) ao-kaQ-ta=N(=ya)	yo[-i=N](=ya) [yo]-kaQ-ta=N(=ya)
		過去	ao-[ka]Q-ta=N=ya 否定 a[o]=na[-i]=N=ya	[yo]-kaQ-ta=N=ya [yo]R=na[-i]=N=ya	ao-kaQ-ta=N(=ya) a[o]=na-i=N(=ya)	[yo]-kaQ-ta=N(=ya) [yo]R=na-i=N(=ya)
良い yo[-i]	疑問文	真偽	[a]o-i=N(=ka) [a]o-i=N(=ya)	yo[-i]=N(=ka) yo[-i]=N(=ya)	[ao-i=N=ka] なし	yo-i=N[=ka] なし
		疑問詞	[a]o-i=N(=ka) [a]o-i=N(=ya)	yo[-i]=N(=ka) yo[-i]=N(=ya)	[ao-i=N=ka] なし	yo-i=N[=ka] なし
ナ形容詞	平叙文	非過去	[hima]-na=N=ya [su]ki-na=N=ya	zyoR[bu]-na=N=ya si[zu]ka-na=N=ya	[hima-na=N](=ya) [suki-na=N](=ya)	zyoRbu-na=[N](=ya) sizuka-na=[N](=ya)
		過去	[hima]-yaQ[-ta]=N=ya [su]ki-yaQ[-ta]=N=ya	zyoR[bu]-yaQ[-ta]=N=ya si[zu]ka-yaQ[-ta]=N=ya	[hima-yaQ-ta=N](=ya) [suki-yaQ-ta=N](=ya)	zyoR[bu]-yaQ-ta=[N](=ya) si[zu]ka-yaQ-ta=[N](=ya)
好きに [su]ki-ni	疑問文	真偽	[hima-de-na]-i=N=ya [su]ki-de-na[-i]=N=ya	zyoRbu[-de]=na[-i]=N=ya si[zu]ka-de=na[-i]=N=ya	[hima-de]=na-i=N(=ya) [su]ki-de=na-i=N(=ya)	zyoRbu[-de]=na-i=[N](=ya) si[zu]ka-de=na-i=[N](=ya)
		疑問詞	[hima]-na=N(=ka) [su]ki-na=N(=ka)	zyoR[bu]-na=N(=ka) si[zu]ka-na=N(=ka)	[hima-na=N=ka] [suki-na=N=ka]	zyoRbu-na=N[=ka] sizuka-na=N[=ka]
静かに si[zu]ka-ni	疑問文	真偽	[hima]=na=N(=ya) [su]ki-na=N(=ya)	zyoR[bu]-na=N(=ya) si[zu]ka-na=N(=ya)	なし なし	なし なし
		疑問詞	[hima]=na=N(=ya) [su]ki-na=N(=ya)	zyoR[bu]-na=N(=ya) si[zu]ka-na=N(=ya)	なし なし	なし なし
名詞	平叙文	非過去	[kaze]=na=N=ya [hu]yu=na=N=ya	u[mi]=na=N=ya a[k]i=na=N=ya	[kaze=na=N](=ya) [hu]yu=na=N(=ya)	umi=na=[N](=ya) aki=na=[N](=ya)
		過去	[kaze]=yaQ[-ta]=N=ya [hu]yu=yaQ[-ta]=N=ya	u[mi]=yaQ-ta=N=ya a[k]i=yaQ-ta=N=ya	[kaze=yaQ-ta=N](=ya) [hu]yu=yaQ-ta=N(=ya)	u[mi]-yaQ-ta=[N](=ya) a[k]i=yaQ-ta=[N](=ya)
冬が [hu]yu=ga	疑問文	真偽	[kaze-de]=na[i]=N=ya [hu]yu-de=na[i]=N=ya	umi[-de]=na[i]=N=ya a[k]i-de=na[i]=N=ya	[kaze-de]=na-i=N(=ya) [hu]yu-de=na-i=N(=ya)	u[mi]=de=na-i=N(=ya) a[k]i=de=na-i=N(=ya)
		疑問詞	[kaze]=na=N(=ka) [hu]yu=na=N(=ka)	u[mi]=na=N(=ka) a[k]i=na=N(=ka)	[kaze=na=N=ka] [hu]yu=na=N=ka]	umi=na=N[=ka] aki=na=N[=ka]
海が umi[=ga]	疑問文	真偽	[kaze]=na=N(=ka) [hu]yu=na=N(=ka)	u[mi]=na=N(=ka) a[k]i=na=N(=ka)	[kaze=na=N=ka] [hu]yu=na=N=ka]	umi=na=N[=ka] aki=na=N[=ka]
		疑問詞	[kaze]=na=N(=ya) [hu]yu=na=N(=ya)	u[mi]=na=N(=ya) a[k]i=na=N(=ya)	なし なし	なし なし

(WT-1938 女性 エリシテーション)

⁵ 低接の用語は和田(1969:6)の「前部が平板型るときわざわざ低く下がって付き、前部が起伏型ならそのまま低くつく」に従う。

⁶ 語幹のアクセントを示すため、ナ形容詞と名詞にはそれぞれ順接の接辞、接語を付ける。

湖北方言の動詞の否定辞は、-Nが無標の形式である⁷。ノダ文に現れる名詞化辞の=Nは、音韻的には撥音の後ろでは=noで現れることと、先行する動詞語幹が否定辞とは異なることから混同することはない。名詞述語、形容詞述語の否定辞は=na-iである。この否定辞が後続する場合は、平板化が及ぶ述語句の範囲は=na-iまでになる⁸。イ形容詞に見られる式の交替は、注3で述べたとおり、形容詞自体のアクセント交替に起因するものであって、ノダ相当形式とは関係なく起こるものであり、ここでの議論には関係しない。

無標の形式の=N=yaは平叙文では必ずコピュラを伴って現れる。このタイプのノダ文は、共通語のノダ文と同様に広い場面で用いることができ、さまざまな接続助詞や終助詞と共に起して、主節にも従属節にも現れる。真偽疑問文ではコピュラ的位置に疑問辞の=kaが、疑問詞疑問文ではコピュラの=yaが随意的に現れる。この場合の疑問辞やコピュラは随意的なので、これらが現れない場合は、疑問文の形式は=Nになり、有標の平叙文と同じ音素配列になる。しかし、無標の形式は通常アクセントを保持するので、アクセントが平板化する有標の平叙文とは容易に区別できる。以下の例文は無標の形式の例である。(1)は動詞述語文の主節に無標の形式が使われている例である。(2)では形容詞述語文の主節に、(3)では形容詞述語文の従属節に無標の形式が使われている。(2)をもとに真偽疑問文と疑問詞疑問文を作成するとそれぞれ(4)と(5)になる。これらの文では、=N=yaは先行する形式の式とアクセント核に影響を与えない。

- (1) [kyoQ]-ta=N=ya
来る・有生・下方待遇⁹・過去 = 名詞化 = コピュラ
「(その人が) 来たのだ。」 (US-1921 男性)
- (2) [mi]na [kaQko]+e¹⁰=N=ya=deto
皆 格好 + 良い = 名詞化 = コピュラ = 終末
「(ひ孫たちは) 皆、格好良いんだよ。」 (US-1921 男性)
- (3) [mi]na [kaQko]+e=N=ya=de yo-i[=na]
皆 格好 + 良い = 名詞化 = コピュラ = 理由 良い - 非過去 = 終末
「皆、格好良いんだからいいね。」 (作例)
- (4) [mi]na [kaQko]+e=N=ka
皆 格好 + 良い = 名詞化 = 疑問

⁷ 動詞に後続する否定辞には有標の異形態として京阪方言などにみられる-heN, -seNも存在するが、ここでの議論には関与しないため取り上げない。

⁸ 査読者によりその背景として=na-iの独立性の高さがあると考えられる点をご指摘いただいている。ご指摘に深謝し詳細については今後の課題としたい。

⁹ 動詞「来る」と融合している接辞の-yor-は、動作動詞では-tor-との間にアスペクト的な対立があるが、ここでは現れない。

¹⁰ 形容詞kaQko+ee「格好良い」は、語末母音の長さに揺れがありここでは短母音で実現している。

- 「皆、格好良いのか。」 (作例)
- (5) [dare=ga] [kaQko]+e=N=ya
誰 = 主格 格好 + 良い = 名詞化 = コピュラ
「誰が格好良いのか。」 (作例)

これに対して有標の形式の =N (=ya) は、コピュラを伴わない形式が優勢で =N によって名詞化される部分を平板化する。(6) では、[yu]R, 「ゆず」という語の高起式の式は継承しているがアクセント核が失われ、述語名詞句が平板化している。このタイプのノダ文は、使用できる場面に制限があり、典型的には真偽疑問文の応答として現れる。(6) は、「これはゆずなのか」という意味の疑問文に対する応答である。

- (6) (この黄色い実は) [yuR =na=N]
ゆず = コピュラ = 名詞化
(この黄色い実は) 「ゆずなのだよ。」 (WT-1938 女性)

この平板化する形式は、直接引用を除いては、主節にのみ現れ、これに後続できる形式は一部の補文標識や疑問辞などに限られる。たとえば (7) のように理由を表す従属節に用いることはできない。また、この形式は疑問詞疑問文を作ることができないので (8) は非文になる。

- (7) [yu]R =na=N=ya/*[yuR =na=N] (=ya)=de
ゆず = コピュラ = 名詞化 = コピュラ / ゆず = コピュラ = 名詞化 = 理由
[ka]ta-i
固い - 非過去
「(この黄色い実は) ゆずなので固い。」
(WT-1938 女性 エリシテーション)
- (8) dore=ga [yu]R=na=N=ya/*[yuR =na=N] (=ya)
どれ = 主格 ゆず = コピュラ = 名詞化 = コピュラ
「どれがゆずなのだ。」 (作例)

この2つのノダ相当形式の現れる環境と形式を整理すると、表2のようになる。

表2 湖北方言のノダ文の出現する環境と形式

	平板化なし (無標)	平板化あり (有標)
平叙文	=N=ya	=N (=ya)
真偽疑問文	=N (=ka)	=N=ka
疑問詞疑問文	=N (=ya)	なし
現れる位置	制限なし	主節のみ

これまでに見たように、無標の形式はアクセントの平板化を引き起こさず、主節にも従属節にも現れる。これに対して有標の形式では、=N を含む述語名詞句が

平板化し、真偽疑問文では疑問辞の =ka が義務的になる。疑問詞疑問文は作れない。直接引用を除いて主節のみに現れる。この平板化する形式でコピュラが現れる場合と現れない場合にはっきりした意味の違いは観察されない¹¹。ここでコピュラを伴わない形式である =N に注目すると、同じ音素配列が無標の形式の疑問文と、有標の形式の平叙文に現れる。表1で示した [wa]kar-u=N 「わかるのか」に対する [wakar-u=N] 「わかるのだ」のように、前部要素のアクセントを保持していれば疑問文、平板化していれば平叙文であることがわかる。すなわち、ここではアクセントの平板化が文のタイプを弁別する機能を果たしている。

この他にこの方言のノダ文の音形に影響を与える可能性がある要素や、類似の形式について補足すると、まず名詞化辞の =N については、少なくとも音韻的にはノダ文以外では通常は =no が現れ =N にはならない。アクセントの平板化もノダ文以外では起こらない。終助詞の =N は、[ha]na=ya=N (=ka) 「花でしょう」のようにコピュラにだけ後接する。この形式は若年層には一般的であるが高齢層には比較的稀であり、名詞化辞の =N と異なりアクセントの平板化を引き起こさない。京阪方言のネン、テンの形式は存在せず、これに相当する形式は =N=ya のみである。イントネーションについては、疑問文に現れる無標の =N は、=N=ya の低接する性質を保ったまま疑問文になるため下降調のように聞こえるが、実際にはアクセント核が保持されていればイントネーションは上昇調¹²でも使用できる。文のタイプについて弁別的に働くのはアクセント核が失われ平板化が起こっているかどうかのほうである。

以上、本節では、湖北方言のノダ文に現れるアクセント形式を概観した。以下の4節ではこれらの意味と用法について考察を行う。

4. 湖北方言のノダ文のアクセント交替とその意味

本節では湖北方言のノダ文に現れる二種類のアクセントパターンはどのような意味に対応しているのかを検討する。ここまで見てきたように、無標の =N=ya の形式は、共通語のノダ文に対応するどのような環境にも現れる。共通語のノダ文の意味と用法は、田野村(1990a)など多くの先行研究で記述、分析されているところであるが、その詳細について比較・検討し記述することは稿を改めることとして、田野村のいう「あることがらの背後の事情を表す」機能を共通語ノダ文の全般にわたる性質として認め、ここでは無標の =N=ya はその全般に対応するものとする。この無標の形式の用法を念頭においた上で、本節では有標の =N (=ya) が担う意味を中心に検討していく。

平板化を引き起こす有標の =N は、典型的には下記の(9)に対する(10)のように、質問に対する答えとして現れる。この形式は、通常対話文でしか現れない。従って、

¹¹ 筆者の内省ではコピュラのない形式にはやや柔らかいニュアンスがある。

¹² この場合は平板化のような急激なピッチの上昇ではなく、文末に向けてゆるやかな上昇が見られる。

(11) のような直接引用の埋め込み文には有標の =N が現れるが、同じように補文化辞で導かれる構造でも (12) のような認識動詞構文の補文に有標の =N が現れることはない。

- (9) ka-i[-taQ]-ta=N=ka
 書く - 挿入母音 - 無生 . 状態 - 過去 = 名詞化 = 疑問
 「書いてあったのか。」 (WD-1936 男性 エリシテーション)
- (10) ka-i-taQ- [ta=N]
 書く - 挿入母音 - 無生 . 状態 - 過去 = 名詞化
 「書いてあったんだ。」 (US-1921 男性)
- (11) ka-i-taQ- [ta=N] (=ya) =te
 書く - 挿入母音 - 無生 . 状態 - 過去 = 名詞化 = 補文化 . 直接引用
 yu-u-ta
 言う - 挿入母音 - 過去
 「『書いてあったんだ。』と言った。」 (作例)
- (12) *ka-i-taQ- [ta=N] (=ya) =to omo-ta
 書く - 挿入母音 - 無生 . 状態 - 過去 = 名詞化 = 補文化 思う - 過去
 「*書いてあったんだと思った。」 (作例)

また, (13) の無標の =N=ya の形式は, 地面が濡れているのを見て雨が降った事実がわかったということを表明する場合にも, 雨が降ったことを知らない相手に「雨が降ったんだよ」と伝える場合にも使用できるが, (14) の有標の形式は, 後者の場合にしか使えない。

- (13) (雨が降ったので畑の水やりをしなくてもよいことに気づいてつぶやく)
 A[me] huQ[-ta]=N=ya
 雨 降る - 過去 = 名詞化 = コピュラ
 「雨が降ったんだ。」 (作例)
- (14) (畑の水やりをしないことを咎められて理由を言う)
 A[me] huQ-ta[=N] (=ya)
 雨 降る - 過去 = 名詞化 = コピュラ
 「雨が降ったんだ。」 (作例)

これを, 諸方言の先行研究に照らして検討すると, たとえば井上 (2006a) は複数のノダ相当形式を持つ方言の用法を論じる際に「実情に関する情報を聞き手に提供する文」として「実情説明」という概念を用いている。これは「話し手内部の認識変化を表出する」という「実情理解」という対立概念を持つが, 井上は「活用をもたない「のだ」相当形式は, 「実情説明」の用法のみを有する (井上 2006a: 184)」という一般化を提示している。これは上述の有標の形式である (14) が自身の理解を表明する場合には使えず, それを他者に伝える場合にのみ使用できること

と軌を一にしている。野間（2014）は井上（2006b）による一般化を進める形で「平叙文の文末において、ノダ相当形式がコピュラなしで使用された場合、意味は「実情説明」に限定される。ただし、終助詞が後接した場合はこの限りではなく、終助詞の意味に左右されることがある。」（野間 2014: 150）という一般化を提示している。これらの場合「実情説明」の局面では、通常対立概念の「実情理解」の局面は既に終わっている。その場で理解したことを表明するのではなく既に理解している実情を説明するものである。これも上述の湖北方言における（13）、（14）の使い分けと合致している。

この考察を共通語を含むノダ文の一般的な性質に敷衍するならば、益岡（2007）のいう、「伝達のモダリティ」を援用することができる。益岡（2007）は、田野村（1990b）の発話時に獲得した認識の指摘をノダ文に援用し「認識系」と「伝達系」のモダリティを区別している。

すなわち、「のだ」にも話し手が発話時に獲得した認識を表す場合と、既定の知識を聞き手に伝達する場合があるということである。ここでは、新規知識の獲得の側面が問題にされる用法を「認識系」、既定知識の伝達の側面が問題にされる用法を「伝達系」と呼ぶことにする。（益岡 2007: 89）

先に有標の形式で見た「対話文にしか使えない」特徴については、ここで「伝達系」の特徴として挙げられているものである。湖北方言では無標の形式が共通語と同様に2種類のモダリティの双方を表現可能なのに対して、有標の形式は（14）のように片方だけに特化した形式として存在する。この事実はこのモダリティの区分の存在を支持すると考えられる。湖北方言の述語名詞句が平板化するノダ文の用法は、益岡の区分を支持し、これをアクセント交替において実現するものであると言えるであろう。

益岡のモダリティの区分は平叙文に関するものであるが、湖北方言においては疑問文についても、この区分を支持する傾向が見られる。無標の形式は疑問詞疑問文を含む文脈で使えるが、有標の形式は話し手の判断の真偽を問うことしかできない。その判断には通常は命題の真偽に対して肯定的な答えが期待される。たとえば無標の（15）は単に試合の結果を知らないのどちらなのかを尋ねる場合にも使用できるが、有標の（16）は、通常は阪神ファンの聞き手が嬉しそうにしているなどの状況から判断して阪神が勝ったと推測できる状況で、その推測は正しいかどうかを尋ねる場合にしか使えず、それ以外の状況で使われる場合は皮肉や冗談などなんらかの語用論的な文脈を想定しないと不自然になる。

- (15) [ha]NsiN kaQ[-ta]=N=ka
 阪神 勝つ - 過去 = 名詞化 = 疑問
 「阪神が勝ったのか？（どっちだろう）」（作例）

- (16) [ha]NsiN kaQ-ta=N[=ka]
 阪神 勝つ - 過去 = 名詞化 = 疑問
 「阪神が勝ったのか? (勝ったんだよね)」(作例)

このことは、疑問文においても話し手が命題の内容について予備知識を持っていることを示唆する。これは、この形式が疑問詞疑問文には使用できないことによっても支持される。平板化を引き起こす N (=ya) は既に内容については話し手には状況などを根拠にした予備知識があることを前提として、平叙文ではその情報を伝え、疑問文ではその真偽を問うものであると考えられる。ここで疑問文に見られる有標の形式の区分は、平叙文において事態の認識が完了していることを前提とする益岡の「伝達系」の区分と直ちに同一視することはできない。しかし湖北方言において本稿に示したような傾向が見られることは、ノダ相当文の方言形式の疑問文一般についてこのような区分を想定することも検討に値することを示唆する。

このような複数のノダ相当形式のうち限られた形式が特定の意味・機能に特化される現象は、2節で見たように先行研究では諸方言のノダ相当文の文法化が進む傾向を示すものと指摘されてきた(新田 2004 ほか)。湖北方言に見られるアクセントの交替が文法化のカテゴリーに該当するかどうかについては、文法化の代表的な特徴である脱範疇化や意味の漂白化が見られるかという点などからなお検討の余地がある¹³。しかし、湖北方言と2節で見たような先行研究におけるノダ文の方言記述との間には、その意味・機能において多くの共通点が認められる。このことは、湖北方言においてこれらに關与するアクセント形式の交替という現象がノダ文の方言形式の文法化の過程についても關与する可能性があることを示唆している。

5. 結論

本稿では、湖北方言でアクセントパターンの交替が現れる2種類のノダ文について記述と分析を行った。この方言には、述語形式のアクセントパターンを保存する無標の形式である =N=ya と、述語形式のアクセントパターンを平板化する有標の =N(=ya) が存在する。無標の =N=ya は、これに先行する形式のアクセントパターンを保持したまま前部要素に低接し、共通語のノダ文と同様の文脈で広く使用できる。これに対して有標の =N(=ya) は、先行する述語形式のアクセントを前部要素のアクセントパターンに關わらず平板化する。その際、前部要素の式は保存され、前部要素と =N を併せたものをドメインとして高起式および低起式が実現するため、無標のノダ文の場合と異なり、=N は前部要素に低接せず高いピッチで発音される。コンピュータが現れる場合は、平板化した形式の後にコンピュータのみが低接する。この形式は、平叙文では既知の実情について説明するものである。その用法は井上 (2006a)

¹³ 査読者により、本稿に提示するデータが有標の =N は無標の =N よりも韻律的に独立性が低下している可能性を示唆しており、このことは文法化を支持する可能性があるというご指摘をいただいている。ご指摘に深謝し詳細については今後の課題としたい。

のいう「実情説明」の概念に合致しており、益岡（2007）のいう「伝達のモダリティ」が現れるときのみ表出される。さらに疑問文においても同様の傾向が見られることは、方言形式のノダ相当文の研究において疑問文についての研究を進めることが必要なことを示唆するものと考えられる。

以上の湖北方言にみられる現象は、これまでの方言記述によって進められてきたノダ文に相当する複数の表現形式の中に、特定の意味用法に特化される形式が存在し、これがいわゆる文法化の一つであるということをサポートする。さらに、これが音韻的なアクセントの交替によって実現するという点において新たな視点を提供するものである。また、モダリティの表出については、平叙文のみならず疑問文についてもそのふるまいをさらに検討すべきであることを湖北方言のデータに基づいて提言する。いずれも異なる形式の詳細な分布とその意味・機能についてさらに詳細な記述と分析が必要とされるところであり、これらについては今後の課題としたい。

参考文献

- 生田早苗（1951）「近畿アクセント圏辺境地区の諸アクセントについて」寺川喜四男・金田一春彦・稲垣正幸編（1951）『国語アクセント論叢』255-346。東京：法政大学出版局。
- 井上優（2006a）「富山県井波方言の「ガヤ」について」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平2文論編』179-192。東京：くろしお出版。
- 井上優（2006b）「第4章 モダリティ」佐々木冠・渋谷勝己・工藤真由美・井上優・日高水穂『シリーズ方言学2 方言の文法』137-178。東京：岩波書店。
- 井之口有一（1952）『滋賀縣言語の調査と対策：方言調査編』彦根：井之口有一（私家版）。
- 角道正佳（1982）「京都方言の動詞と形容詞のアクセント交替」『日本語・日本文化』11: 1-28。
- 寛大城（1962）「滋賀県方言」棟垣実（編）『近畿方言の総合的研究』159-217。東京：三省堂。
- 田野村忠温（1990a）『現代日本語の文法I—「のだ」の意味と用法』大阪：和泉書院。
- 田野村忠温（1990b）「文における判断をめぐって」崎山理編『アジアの諸言語と一般言語学』785-795。東京：三省堂。
- 中井幸比古編著（2002）『京阪系アクセント辞典』東京：勉誠出版。
- 新田哲夫（2004）「石川県金沢方言のガヤとその周辺」中井精一・内山純蔵・高橋浩二編『日本海沿岸の地域特性とことば—富山県方言の過去・現在・未来—』163-182。桂書房。
- 日本語学会編（2018）『日本語学大辞典』東京：東京堂出版。
- 野間純平（2014）「方言におけるノダ相当形式の発展—大阪方言と石川方言を中心に」博士論文。大阪大学。
- 野間純平（2019）「甕島里方言のノダ相当形式にみられる音変化—他方言と対照して—」窪菌晴夫・木部暢子・高木千恵編『鹿児島県甕島方言からみる文法の諸相』249-271。東京：くろしお出版。
- 益岡隆志（2007）『日本語モダリティ探究』東京：くろしお出版。
- 山口幸洋（1998）「垂井式諸アクセントの性格」『国語学』155: 1-16。
- 脇坂美和子（2015）「滋賀県湖北方言の動詞につく助詞と接辞のアクセントについて」『京都大学言語学研究』34: 69-88。
- 和田實（1969）「辞のアクセント」『国語研究』29: 1-20。

執筆者連絡先：
e-mail: mauswara57[at]gmail.com

[受領日 2019年12月31日
最終原稿受理日 2021年7月28日]

Abstract**Pitch Accent Patterns, Forms, and Meanings of ‘no=da’ Sentences
in the Japanese Kohoku Dialect**

MIWAKO WAKIZAKA

This paper aims to describe two accent pattern alternations observed in the Keihan-type accent of the Japanese Kohoku dialect spoken in Shiga prefecture, and to clarify their forms and meanings. This dialect has two varieties of the ‘no=da’ structure for nominal predicates; one is the unmarked ‘=N=ya’ that maintains pitch patterns of predicate sentences, and the other is the marked ‘=N (=ya)’ that cancels pitch patterns, removing the accent. The unmarked form can be used in any situation where ‘no=da’ would be used in standard Japanese, whereas the marked form only appears in cases where the speaker has prior knowledge of the topic and intends to explain or confirm that knowledge with the hearer. The alternation patterns of the ‘no=da’ structure in declarative sentences corresponds with previous studies such as Inoue (2006a), which explain that different dialect varieties distinguish two different meanings of ‘no=da’ in standard Japanese. They also support the argument that such patterns can be considered grammaticalization in Japanese dialects, and suggest that they can be applied in interrogative sentences. In this dialect, differentiation occurs through accent alternations, and meaning is related to modality. Taking these into account, this paper argues that pitch patterns are important factors that should be considered in relation to grammaticalization and modality in Japanese dialects.